

いわみ じょう あと 石見城跡 (第2次)

調査期間：令和4年11月14日(月)～12月21日(水)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 石見城跡について

石見城跡は、京都市西京区大原野石見町に広がる周知の遺跡です。室町時代(14世紀後半～16世紀)、この地域一帯は「西岡^{にしのおか}」と呼ばれ、複数の領主が連帯して治めていました。彼らは室町幕府の有力者や将軍の側近と結びつくことで勢力を強め、「西岡被官衆^{にしのおかひかんしゅう}」と呼ばれるようになりました。被官衆は、それぞれが治める地域に城や館を築きました。ここ石見の地には、「石見館」が築かれたと考えられています。その領主は小野氏であったとする説がありますが、まだはっきりとは分かっていません。

1467年、京を揺るがす大戦争である応仁の乱が始まると、西岡衆は細川勝元が率いる東軍に属して西軍の山名

宗全らと戦いました。しかし戦いが長引くにつれて、被官衆の中から西軍に味方する者が現れました。文献史料によると、石見館は文明2年(1470)に寺戸城主であった野田泰忠(東軍)の攻撃を受け、善峰川の対岸にある上里館と共に焼失しました。その後、石見館の情報は途絶えてしまい、実態は長く謎に包まれたままとなりました。

2 これまでの発掘調査

平成16年(2004)、石見町のほぼ中央を南北に通る都市計画道路「中山石見線」を建設するため、(公財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行いました。当初、この調査は8世紀に造られた「長岡京跡」の遺構を確認する

ことを目的としていましたが、予想外に、鎌倉時代から室町時代(12～16世紀)の建物や土器等が多く発見されました。このうち、室町時代前半(14～15世紀)の建物の主軸が、東側の高台に残る高まりや窪みの方向と揃うことがわかりました。このため、遺跡が高台を含む一帯に広がること、また高まりや窪みが城の堀や土塁の名残ではないか、と考えられるようになりました。

令和3年、京都市文化財保護課は、石見城の存在と構造を明らかとするため、改めて発掘調査を開始しました。第1次調査では、城の北東角にあたる地点を調査し、地表面から30cmという浅い深度において、鎌倉時代から室町時代の遺構面を確認しました。また、最大幅5.5mに及び大規模な堀跡2条(新旧2時期)を発見しました。このことから、現代の地表面に残る凹凸が、城の堀や土塁の名残である可能性がますます高まりました。

3 今回の発掘調査成果

続く今回の第2次調査では、城の範囲が具体的にどこまで広がるのか、また地表に残る窪みや高まりが、どの時代まで遡るのかを探るため、3箇所に調査区を設定しました。

城の西側に設けた1区では、東側と同じく堀などの^{ぼうぎょしせつ}防御施設が作られていたかどうか注目しました。調査の結果、同じく^{れき}礫で埋まった堀の^{かたぐち}肩口を発見しました。この堀は15世紀の整地層で覆われており、近くからは建物の柱穴や土坑がみつかりました。人々が古い堀を埋め戻し、住む場所を拡張したと考えられます。

続く2区では、土塁と堀の年代を探るため、両者を横断するように調査区を設定しました。その結果、ここでも新旧2時期の堀が見つかりました。古い堀は13世紀までに掘られたもので、礫で丁寧に埋め戻されていました。また新しい堀は15世紀に掘られたことがわかりました。

現代の水路の窪みを利用して設定した3区でも、土塁や堀の起伏を確認しました。ここで見つかった堀はやや小型で、城内を区画する溝と考えられます。

以上の成果から、この遺跡では、鎌倉時代に大規模な堀と土塁が築かれたこと、また室町時代には城の内部(郭?)が拡張されるとともに、より大規模な堀をもつ施設として作り直されたことが明らかとなりました。被熱土壌^{ひねつとしょう}(火災で焼けた土)も見つかっていることから、この遺跡が「石見館」に該当する可能性は非常に高まったと言えます。

(黒須亜希子)

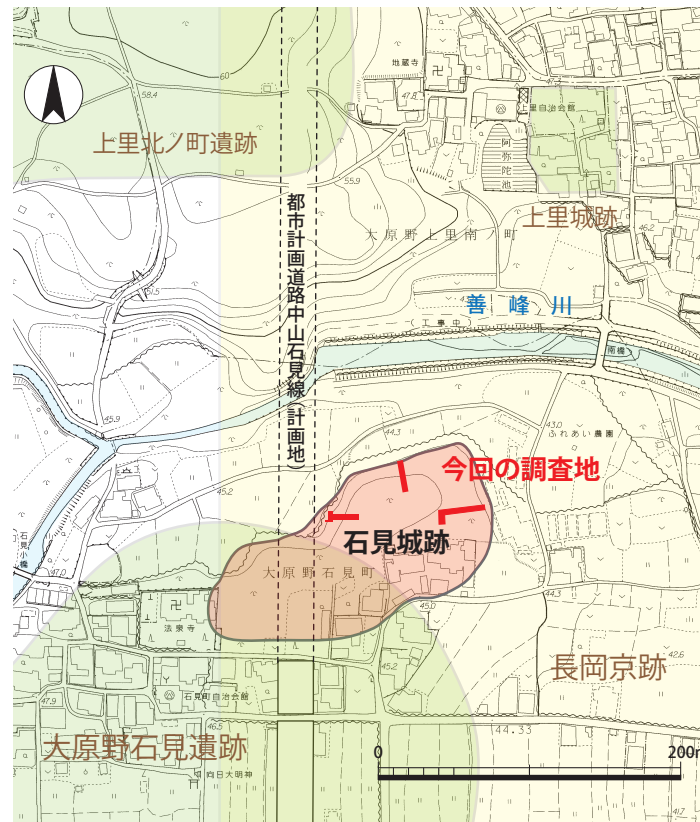


図1 調査位置と周辺の遺跡分布図

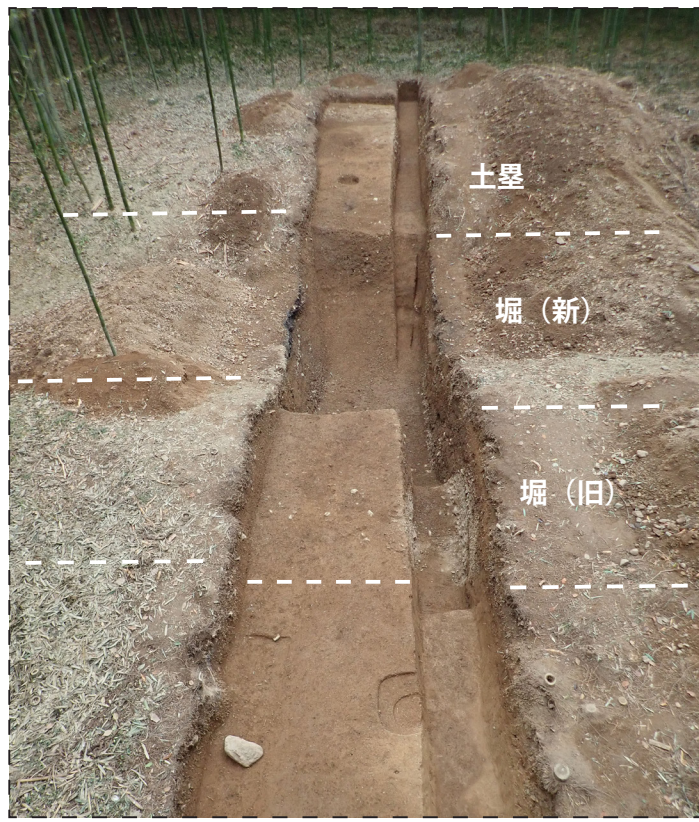


図2 2区で見つかった新旧の堀

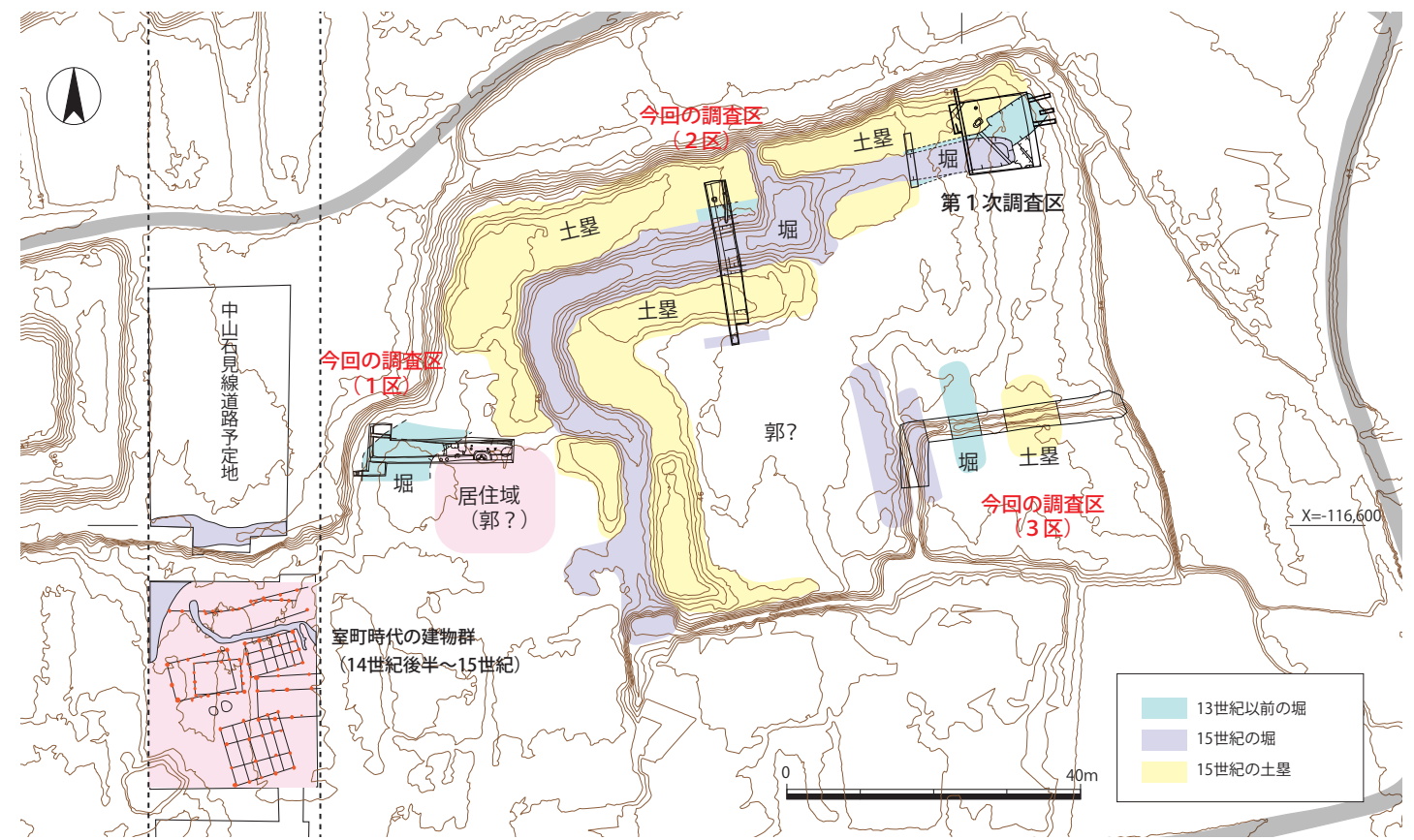


図3 発掘調査成果接合図